



北山太樹：日本の海藻展示 —国立科学博物館の場合—

生物を展示する手法は2つに分けられる。本物か偽物かである。このように書くと言弊があるかも知れないので以下「実物かレプリカか」に置き換えて書くけれども、どれほど複製技術が進歩し、実物との見分けが困難になろうとも、レプリカは実物に及ばない。それはお客さんの「これは本物ですか?」というお決まりの質問に端的に現れている。むしろレプリカにみられる今日の著しい精度向上は、実物の代替品を目指すよりも、作品そのものの芸術性を追求している(ある意味、本物である)ようにすらみえる。インターネット上に電子画像が無尽蔵に溢れ、外出せずとも目的の生物の写真が見られる時代を迎えて、美術館とも競合しつつある博物館は、実物にこだわり実物をいかに実物らしく(あるいは美術品らしく)展示できるかを考えなければならない状況にあるといえるだろう。

今年4月、国立科学博物館(上野本館)に「日本館」がオープンした。平成16年11月から改装工事が行われていた昭和5年建築の「本館」で、かつては千原光雄先生がつくられた常設の藻類展示があったところである。テーマは「日本」。そこで、その3階南「日本列島の素顔」エリアに、日本の代表的な海藻を紹介する展示を設けた(図1)。展示品は基本的に押し葉標本であるが、台紙を使用せずに2枚のガラスにはさんだものを配置した。後ろから白色光を当て、海藻がもつ色と形の面白さを強調することを狙った。一般に海藻の押し葉標本は明るい照明下で展示すると、短期間で褪色が起こるのが難点であるが、ここに展示されている海藻は、2枚のガラスの間に樹脂とともに密封されているため、いまのところ藻体の色が保たれている。実物の海藻を、着色することなく葉緑体が呈する実際の色のまま展示できる1つの方法と考えている。

この新しい展示室のユニークな点のひとつに、随所におかれた小さなコラム展示が挙げられる。海藻については「昆布のはる



図1 日本館展示「日本の海藻」。海藻相区別別に18種の日本産海藻を配置：(左上から)カサノリ、クビレスダ、ミツデサボテングサ、ムラチドリ、アナアオサ、カヤモノリ、アミジグサ、ワカメ、ヒラミル、トサカノリ、アントクメ、フシシジモク、ツルアラメ、アナダルス、コノハノリ、クシベニヒバ、ナガコンブ、アナメ(アナダルスは吉崎誠先生が採集)。各種の解説は、キオスク端末の画面で読むことができる。

かな道」というタイトルで昆布文化の伝播をとりあげた展示を用意した(図2)。小さな小さな展示であるが、気合いの入った大型展示ばかりで単調になりがちな常設展の流れに緩急をつける効果がある。見上げるような大きな展示ケースに眼が慣れ首が疲れた来館者には、気分転換や休憩になるのではないかと思う。

会員諸賢には是非一度ご覧いただき、ご意見・ご感想や新たな海藻展示のアイデアなどご教示いただけたら有り難い。

(国立科学博物館)

【国立科学博物館(本館)】

所在地：〒110-8718 東京都台東区上野公園7-20。Tel: 03-3822-0111 (平日)・03-3822-0114 (土・日・祝祭日)。Fax: 03-5894-9898。HP: <http://www.kahaku.go.jp/>。交通：JR上野駅公園口から徒歩5分もしくは東京メトロ銀座線・日比谷線上野駅から徒歩10分。開館時間：9:00-17:00(入館は16:30まで)、ただし金曜日のみ9:00-20:00(入館は19:30まで)。休館日：月曜日(日・月が祝日の場合は火曜日)、年末年始(12月28日～1月1日)。入館料：一般・大学生600円、小学生・中学生・高校生・満65歳以上・障害者とその介護者無料(20名以上の団体入館者は300円で、20名につき引率者1名が無料)。



図2 コラム展示「昆布のはるかな道」。なぜ沖縄料理に昆布が使われているのかをコンパクトに解説。金城次郎一門陶器の上にクーブリチー(昆布炒め煮)が盛られている(右は川嶋昭二先生)。